

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	歌詞としての「長恨歌」 : 白居易歌詩の押韻について
Author(s)	陳, #
Citation	中國中世文學研究 , 65 : 12 - 21
Issue Date	2015-03-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042516
Right	
Relation	



としての自覚」一一五頁〜一一九頁参照。

※編集委員からのお詫び

山田和大氏「韋忠物『冰賦』の諷諭性について」は、編集作業の段階でファイルを取り違え、「中国中世文学研究」第63・64合併号には査読委員の意見による修正を加える前の原稿を掲載してしまいました。関係諸氏にはお詫びを申し上げますとともに、本号に改めて修正稿を掲載させていただきます。

歌詞としての「長恨歌」

―白居易歌詩の押韻について―

陳 翀

一
拙稿「中唐における白居易『琵琶引』享受の原風景―その原本形態及び歌唱形式について―」は、白居易の名作である「琵琶引」を取り上げ、「琵琶引」が当初は歌われる歌詞として作られた作品であることを明らかにし、さらに、その押韻の仕組みが一般の七言排律詩の偶数句押韻とは異なっており、上下句押韻という独立したパターンが存在していることを指摘した¹⁾。引き続き、本稿では同じく『白氏文集』巻十二に収録されている「長恨歌」に焦点を当て、その押韻の仕組みについて考察を加える。これによって、「琵琶引」と同様に、「長恨歌」も一定の曲調に従って創作された歌詩であり、当初は歌われる歌詞として作られたものであることを明らかにする。

二

「長恨歌」研究史を振り返ってみるとき、恐らく殆ど
の研究者が、「長恨歌」を主に李楊故事を詠ずる七言排律

詩、つまり長篇の叙事詩として認識してきたことが看取できる。このような視点は、近年公刊された「長恨歌」関連の専著及び訳注書にも踏襲されている。例えば、下定雅弘氏は、『長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』において、「長恨歌」の構造について、次のように分析している²⁾。

「長恨歌」は大きくは二段に分けることができる。前段は「漢皇色を重んじて傾国を思う、御寓多年求むれども得ず」から、七三・七四句「悠悠たる生死別れて年を経たり、魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」までで、人間世界における玄宗と楊貴妃との愛の物語である。玄宗が絶世の美女楊貴妃をみつけ、貴妃への愛の虜となって過ごす日々と、貴妃が馬嵬で亡くなって、玄宗が悲嘆にくれるさまを歌っている。

後段は、七五・七六句「臨邛の方士鴻都の客、能く精誠を以って魂魄を致す」から、最後の「天長く地久しきも時有りて尽く、此の恨み綿綿として絶ゆ

る期無からん」まで、玄宗が方士を發遣して貴妃を探索させ、仙界にいる貴妃の消息をたしかめるが、貴妃との愛の日々が二度ともどらぬ痛恨の情を歌って終わっている。

さらに、前段について、下定氏は「これを三つに分けることができる」と述べ、また、後段については「七五句から結句まで。これをさらに段落に分割する必要はない」という考え方を提示する。

一方、川合康三氏は、『白居易詩選』において、「長恨歌」を十四段に分けている。以下は、川合氏の分段法及び各段末に付した解説を抽出したものである³⁾。

- 第一段 (一〜八)、皇帝が美女を捜求、見いだした女を後宮に入れるまで。
- 第二段 (九〜十六)、華清宮での歓楽の日々。
- 第三段 (十七〜二十六)、寵愛は一門まで及ぶ。
- 第四段 (二十七〜三十四)、歓楽のさなかに安祿山の乱が起こり、天子は宮廷から逃れる。
- 第五段 (三十五〜四十二)、蜀への途上で貴妃に死を賜う。
- 第六段 (四十三〜五十)、蜀の行宮における天子の悲哀。
- 第七段 (五十一〜五十六)、蜀から長安へ帰還する。
- 第八段 (五十七〜六十六)、貴妃なき宮殿の寂漠。
- 第九段 (六十七〜七十四)、「孤閨(独り寝)」に悲し

説明がある⁶⁾。

詩迄於周、離騷迄於楚、是後詩之流爲二十四名、賦頌銘贊文誄箴詩行詠吟題怨歎章篇操引謠歌曲詞調、皆詩人六義之餘。而作者之旨、由操而下八名、皆起於郊祭、軍賓、吉凶、苦樂之際。在音聲者、因聲以度詞、審調以節唱。句度短長之數、聲韻平上之差、莫不由之准度。而又別在琴瑟者爲操引、採民疇者爲謳謠、備曲度者總得爲謂之歌曲詞調、斯皆由樂以定詞、非選詞以配樂也。

元稹の記述によれば、「歌」とは、そもそも「由樂以定詞(樂に由りて以て詞を定む)」、つまり既定の曲調に従って歌詞を作る文体であることがわかる。換言すれば、「琵琶引」と同様に、「長恨歌」も、本来は案頭で読む作品として書き綴られたものではなく、音楽に乗せて唱える歌曲として作られたものであると想定しなければならぬ。だとすれば、「長恨歌」の押韻の仕組みも、一般の七言排律詩と異なり、上下押韻という和送声の独立したパートが存在すべきである。

以下に、「長恨歌」全二百二十句の韻を調べ、その本文の各パートの構成を復原したものを示す(網掛けは押韻字の韻目を示す)⁷⁾。

(一) 001 漢皇重色思傾國 入聲25「德」

- 第十段 (七十五〜八十二)、方士による貴妃探索。
- 第十一段 (八十三〜九十二)、仙界に貴妃を見つける。
- 第十二段 (九十三〜一〇〇)、女仙となった貴妃の登場。
- 第十三段 (一〇一〜一一二)、帝への思いを語る貴妃。
- 第十四段 (一一三〜一二〇)、二人で交わした誓いと愛を讀める結び。

以上のように、「長恨歌」の構造については、下定氏にしても、川合氏にしても、具体的な分段こそ違うが、物語の展開によって分段するという基本的な視点自体は同じだと思われる。右に言及したように、このような読み方は、「長恨歌」を李楊故事を詠ずる七言排律の長篇の叙事詩とする認識と軌を一にしており、現在の「長恨歌」研究の起点ともなっており、既に長く定着してきたと言えるだろう⁸⁾。

三

周知のように、「長恨歌」は『白氏文集』卷十二に収録されている。金沢文庫旧蔵本(鎌倉時代豊原奉重写惠尊鈔南禅院系統本)によれば、その巻目は「歌行曲引 感傷四 雜言」であることがわかる⁹⁾。つまり、「長恨歌」の「歌」は、巻目に記された文体であると理解すべきであろう。ちなみに、中唐における各文体に対する定義に関して、次に掲げた元稹(七九六〜八三三)「樂府古題序」に詳細な

<p>(四) 022021020019 漢宮佳麗三千人 上平17「真」 三千寵愛在一身 上平17「真」 金屋粧成嬌侍夜 去聲40「禡」 玉樓宴罷醉和春 上平18「諄」</p>	<p>● 018017 承歡侍宴無閑暇 去聲40「禡」 春從春遊夜專夜 去聲40「禡」</p>	<p>(三) 016015014013 雲鬢花顏金步搖 下平04「宵」 芙蓉帳暖度春霄 下平04「宵」 春霄苦短日高起 上聲06「止」 從此君王不早朝 下平04「宵」</p>	<p>(二) 012011010009 春寒賜浴華清池 上平05「支」 溫泉水滑洗凝脂 上平06「脂」 侍兒扶起嬌無力 入聲24「職」 始是新承恩澤時 上平07「之」</p>	<p>008007006005004003002 御寓多年求不得 入聲25「德」 楊家有女初長成 下平14「清」 養在深窓人未識 入聲24「職」 天生麗質難自弃 去聲06「至」 一朝選在君王側 入聲24「職」 迴眸一笑百媚生 下平12「庚」 六宮粉黛無顏色 入聲24「職」</p>
---	---	---	---	--

(五)

姊妹弟兄皆列土
可憐光彩生門戶
遂令天下父母心
不重生男重生女

(六)

驪宮高處入青雲
仙樂風飄處處聞
緩歌慢舞凝絲竹
盡日君王看不足
漁陽鞞鼓動地來
驚破霓裳羽衣曲

(七)

九重城闕煙塵生
千乘萬騎西南行
翠花搖搖行復止
西出都門百餘里
六軍不發無奈何
宛轉蛾眉馬前死

(八)

花鈿委地無人收
翠翹金雀玉搔頭
君王掩眼救不得

(九)

迴看淚血相和流
黃埃散漫風蕭索
雲棧綈迴登劍閣
峨嵋山下少行人
旌旗無光日色薄

(十)

蜀江水碧蜀山青
聖主朝朝暮暮情
行宮見月傷心色
夜雨聞猿腸斷聲

(十一)

天旋日轉迴龍馭
到此躊躇不能去
馬嵬坡下泥土中
不見玉顏空死處

(十二)

君臣相顧盡落衣
東望都門信馬歸
歸來池苑皆依舊
太液芙蓉未央柳

(十三)

對此如何不淚垂
芙蓉如面柳如眉

(十三)

春風桃李花開日
秋雨梧桐葉落時

(十四)

上窮碧落下黃泉
兩處茫茫皆不見

(十四)

西宮南內多秋草
落葉滿階紅不掃
梨園弟子白髮新
椒房阿監青蛾老

(十五)

樓殿玲瓏五雲起
其上綽約多仙子
中有一人字玉妃
雪膚花兒參差是

(十五)

夕殿螢飛思悄然
秋燈挑盡未能眠
遲遲鍾漏初長夜
耿耿星河欲曙天

(十六)

金闕西廂叩玉扃
轉教小玉報雙成
聞道漢家天子使
九華帳裏夢中驚

(十六)

鴛鴦瓦冷霜花重
舊枕故衾誰與共
悠悠生死別經年
魂魄不曾來入夢

(十七)

擎衣推枕起徘徊
珠箔銀屏遞迤開
雲鬢半偏新睡覺
花冠不整下堂來

(十七)

臨邛道士鴻都客
能以精誠致魂魄
爲感君王展轉思
遂教方士殷勤覓

(十八)

風吹仙袂飄飄舉
猶似霓裳羽衣舞
玉容寂寞淚瀾干
梨花一枝春帶雨

前節で行った「長恨歌」全一百二十句の押韻字の調査から、「長恨歌」が一般の排律詩とは異なっていること、そして全二十五パートによつて構成される歌詞であることが浮き彫りになる。また、最初の第一パートと最後の第二十五パートだけが八句の七律形式となつているのを除けば、他の二十三パートは、いずれも四句の七言絶句という詩型を採用していることも窺える。七絶を曲詞として歌うこのようなスタイルは、正しく大暦年間以後に一世を風靡した「絶句定為歌曲（絶句もて定めて歌曲と為す）」という音楽ブームに符合するものであろう¹⁸⁾。

ちなみに、「長恨歌」のこのような七言絶句形式の四句を独立したパートとする作詞の手法は、少なくとも南宋まではきちんと認知されていたようである。例えば、下引の南宋時代の范成大^{二二六}、^{二二九}の「統長恨歌七首」は、正しくこのような手法を踏襲した後継作であるとも言える¹⁹⁾。

金杯激灑曉粧寒、國色天香勝牡丹。白鳳詔書來已暮、
六宮鉛粉半春闌。
紫薇金屋閉春陽、石竹山花却自芳。莫道故情無覓處、
領巾猶有隔生香。
聞道蓬壺重見時、瘦來全不耐風吹。無端却作塵間念、
已被仙官聖得知。
別後相思夢亦難、東虛雲路海漫漫。仙凡頓隔銀屏影、

(二二)

含情凝睇謝君王 下平10「陽」
一別音容兩渺茫 下平11「唐」
照陽殿裏恩愛歇 入聲10「月」
蓬萊宮中日月長 下平10「陽」

(二三)

迴頭下視人寰處 去聲09「御」
不見長安見塵霧 去聲10「遇」
空持舊物表深情 下平14「清」
鈿合金鈿寄將去 去聲09「御」

(二四)

釵留一鈿合一扇 去聲33「線」
釵擘黃金合分鈿 去聲32「霰」
但教心似金鈿堅 下平01「先」
天上人間會相見 去聲32「霰」

(二五)

臨別殷勤重寄詞 上平07「之」
詞中有誓兩心知 上平05「支」
七月七日長生殿 去聲32「霰」
夜半無人私語時 上平07「之」
在天願作比翼鳥 上聲29「篠」
在地願爲連理枝 上平05「支」
天長地久有時盡 上聲16「軫」
此恨綿綿無絕期 上平07「之」

不似當時取次看。
人似飛花去不歸、蘭昌宮殿幾斜暉。百年只有雲容姊、
留得當時舊舞衣。
驪山六十二高樓、突兀華清最上頭。玉羽川長湘浦暗、
三郎無事更神遊。
帝鄉雲馭若為留、八景三清好在不。玉笛不隨雙鶴去、
人間猶得聽梁州。

さらに無視できないのは、「琵琶引」と同じく、「長恨歌」にも、各パートの間に併せて六つの和送声パートが挿入されているという事実である。しかも、「琵琶引」第一四三「十三学得琵琶成（下平14清）」・四四「名属教坊第一部（上声10姥）」にも見られるような上下句非押韻の和送声パート（第五十七・五十八）も存在する。以上のことを踏まえてみれば、白居易が「長恨歌」と「琵琶引」を創作する際に、ほぼ同一の基本手法を採用していたことが推察できる。あるいはこれは、中唐時代の長篇歌詞に共通する特徴であると想定すべきなのかもしれない。ちなみに、同じく卷十二に収録される「醉後走筆酬刘五主簿长句之赠兼简张大贾二十四二先辈昆季」詩^{〇五四}にも、「琵琶引」「長恨歌」と同じような構造が窺える。そのパートの構成を整理して以下に示す。

(一) 劉兄文高行孤立 入声26輯
十五年名前翁習 入声26輯

是時相遇在符離 上平05支
我年二十君三十 入声26輯

(二) 得意忘年心迹親 上平17真
寓居同縣日知聞 上平20文
衡門寂寞朝尋我 上声33智
古寺蕭條暮訪君 上平20文

(三) 朝來暮去多攜手 上声44有
窮巷貧居何所有 上声44有
秋燈夜寫聯句詩 上平07之
春雪朝傾煖寒酒 上声44有

(四) 陣湖綠愛白鷗飛 上平08微
灘水清憐紅鯉肥 上平08微
偶語閒攀芳樹立 入声26輯
相扶醉蹋落花歸 上平08微

(五) 張賈弟兄同里巷 去声04絳
乘閒數數來相訪 去声41漾
雨天連宿草堂中 上平01東
月夜徐行草橋上 去声41漾

(六) 我年漸長忽自驚 下平12庚
鏡中冉冉髭鬚生 下平12庚

心畏後時同勵志
身牽前事各求名
去聲 07 志
下平 14 清

(七)

問我棲棲何所適
鄉人薦為鹿鳴客
入聲 22 昔
入聲 20 陌
二千里外謝交遊
下平 18 尤
三十韻詩慰行役
入聲 22 昔

(八)

出門可憐唯一身
弊裘瘦馬入咸秦
上平 17 真
上平 17 真
攀髻街鼓紅塵鬧
去聲 53 勘
晚到長安無主人
上平 17 真

(九)

二賈二張與余弟
驅車邈迤來相繼
去聲 12 霽
去聲 12 霽
操詞握賦為干戈
下平 08 戈
鋒銳森然勝氣多
下平 07 歌
同人文場多苦戰
去聲 33 線
五人十載九登科
下平 08 戈

(十)

二張得雋名居甲
美退爭雄重告捷
入聲 32 狎
入聲 29 葉
棠棣輝榮並桂枝
上平 05 支
芝蘭芬馥和荆葉
入聲 29 葉

職居密近門多閉

(十五)

日暮銀臺下直回
故人到門門暫開
上平 15 灰
上平 16 賄
回頭下馬一相顧
去聲 11 暮
塵土滿衣何處來
上平 16 賄

(十六)

斂手炎涼敘未畢
先說舊山今悔出
入聲 05 質
入聲 05 質
岐陽旅宦少歡娛
上平 10 虞
江左遷遊費時日
入聲 05 質

(十七)

贈我一篇行路吟
吟之句句披沙金
下平 21 侵
下平 21 侵
歲月徒催白髮貌
去聲 36 効
泥塗不屈青雲心
下平 21 侵

(十八)

誰謂茫茫天地意
短才獲用長才棄
去聲 07 去
去聲 06 至

我隨鷓鴣入煙雲
上平 20 文
上平 17 真
上平 17 真
君同鸞鳳棲荆棘
入聲 24 職
上平 17 真
猶著青袍作選人
上平 17 真

(十一)

唯有沅犀屈未伸
握中自謂駭雞珍
上平 17 真
上平 17 真
三年不鳴鳴必大
去聲 14 泰
豈獨駭雞當駭人
上平 17 真

(十二)

元和運氣千年聖
去聲 45 勁
同遇明時余最幸
上聲 39 耿

(十三)

始辭秘閣吏王畿
上平 08 微
遽列諫垣升禁闈
去聲 08 未
蹇步何堪鳴珮玉
入聲 03 燭
衰容不稱著朝衣
去聲 08 未

(十四)

閶闔晨開朝百辟
入聲 22 昔
暈旒不動香煙碧
入聲 22 昔
步登龍尾上虛空
上平 01 東
立去天顏無咫尺
入聲 22 昔

(十五)

宮花似雪從乘興
上平 09 魚
禁月如霜坐直廬
上平 09 魚
身賤每驚隨內宴
去聲 32 霰
才微常愧草天書
上平 09 魚
晚松寒竹新昌第
去聲 12 霽

(十六)

惆悵知賢不能薦
去聲 32 霰
徒為出入蓬萊殿
去聲 32 霰
月慙諫紙二百張
下平 10 陽
歲愧俸錢三十萬
去聲 25 願

(十七)

大底浮榮何足道
上聲 32 皓
幾度相逢即身老
上聲 32 皓

(十八)

且傾斗酒慰羈愁
下平 18 尤
重話符離問舊遊
下平 18 尤

(十九)

北巷鄰居幾家去
去聲 09 御
東林舊院何人住
去聲 10 遇
武里村花落復開
上平 16 哈
流溝山色應如故
去聲 11 暮

(二十)

感此酬君千字詩
上平 07 之
醉中分手又何之
上平 07 之
須知通塞尋常事
去聲 07 志
莫歎浮沈先後時
上平 07 之

(二十一)

慷慨臨岐重相勉
上聲 28 獮
殷勤別後加飡飯
上聲 20 阮
君不見
去聲 32 霰
買臣衣錦還故鄉
下平 10 陽

五

以上の考証によれば、「長恨歌」は、演唱するために創作された歌詞であることが明らかに。また、現存の資料からみれば、その音曲は、「霓裳羽衣曲」である可能性が考えられる^[5]。だとすれば、日本に現存する「長恨歌並序」と、宋刊本の「長恨歌伝・長恨歌」との関係などのテキストの諸問題について、もう一度検討し直す必要が浮上する。紙幅の都合から、これらの問題に関する考証は、別稿に譲りたい^[6]。

注

[1] 陳狷「中唐における白居易『琵琶引』享受の原風景―その原本形態及び歌唱形式について―」、『白居易研究年報第十三号 特集 琵琶行―天涯淪落の歌』、勉誠出版、二〇二二年）を参照。

[2] 下定雅弘『長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』（勉誠出版、二〇二一年）第二部「研究編」を参照。

[3] 川合康三訳注『白楽天詩選上』（岩波文庫赤四四一、二〇二一年）所収「長恨歌」を参照。

[4] 日中における「長恨歌」研究史については、『白居易年報第十二号 特集 長恨歌―愛と死の文学』に収録した周相録（陳狷訳）「中国における『長恨歌』研究」及び新聞一美「わが国における『長恨歌』の受容について」を参照。

抄本から版本への移行過程における著述及び出版の特徴

―『唐文粹』の編纂と流伝の過程の考察―

査 屏 球（日本語訳 渡部雄之）

はじめに

テキストの媒体と流伝形式の発展は、常に文学と学術を盛んにしてきた。簡牘から紙への移行が漢末及び西晋の文学の発展を促したように、北宋前期には、印刷出版業が発達の時期に入り、書籍の流通が大いに加速した。詩文の創作だけでなく、個人の書籍の編纂も日増しに積極的に行われるようになった。唐末五代の戦乱を経た後の宋人は、繁栄を極めた唐王朝に強い憧れを抱いており、また唐代の抄本は宋初にはなお大量に伝わっていたため、そうした文献の整理と編纂は当時の出版業の主な仕事となった。北宋前期におけるこうした個人の書籍編纂と、印刷業が完全に商業化した後の出版活動には異なる部分がある。書籍編纂者は学問を積んだ文人や学者であるか、家の蔵書が豊富で比較的十分な資料があり、それらを伝承するという自覚を持った者、あるいはそうした出版活動を仕官する一つの方法と考えている者であり、そ

[5] 『白氏文集』の旧来の巻目に関する考証は、静永健・陳狷『文選』と『文集』（『中国文学研究』第十九輯、復旦大学出版社、二〇二二年）及び杜曉勤（秋谷幸治訳）『白氏文集』前集の編纂体裁と詩体分類について―日本現存の旧鈔本を中心に―（『白居易研究年報第十四号 特集 閑適と隱遁』、勉誠出版、二〇一三年）を参照。

[6] 『元氏長慶集』（冀勤點校、中華書局、一九八二年）巻二十三を参照。

[7] 本文は、金沢本に従う。韻字の押韻は、『大宋重修広韻』に従う。なお、旧鈔本と版本との文字異同について、神鷹徳治「紫式部が読んだ『文集』のテキスト―旧鈔本と刊本―」（『古代学研究所紀要』第五号、二〇〇七年）及び静永健「日本・尊円親王筆『長恨歌』の本文について」（『中国文学論集』第三十九号、二〇一〇年、のち『知非子甲集』（二〇一四年十月私家版、城島印刷株式会社）に収録）を参照。

[8] これに関する考察は、前掲注[1]拙論を参照。

[9] 范成大『石湖詩集』（四部叢刊初編本）巻一を参照。

[10] このことについては、拙稿「日藏舊鈔本『長恨歌序』真偽考―兼論『長恨歌』主題及其文本傳變」（『域外漢籍研究集刊』第七輯、中華書局、二〇一一年）を参照。

[11] 拙稿「新発見の『長恨歌伝』について」（『中国文学論集』四十三号、二〇一四年）及び『長恨歌並序』之歌辭結構及傳本考」（『域外漢籍研究集刊』第十一輯、中華書局、二〇一五年六月刊行予定）を参照。

った人々にはまだそれほど商業的利益をあげようという考えはない。編纂者にとつて、そうした本を出版する目的は文献の保存だけでなく、文化に対する自身の理念を伝えることにあつた。姚鉉の『唐文粹』は、まさしくこうした背景があつて生み出された著作である。『唐文粹』はテキストの媒体の変化によって生まれたものであり、また唐代の文化や文学に対する姚鉉の理解と選択を表すものでもある。以下、本書の編纂と流伝の過程の両面から、このことについて考察を行う。

一 『唐文粹』成立の背景とテキストの信憑性

「唐文粹序」に「大中祥符紀号之四祀、皇帝祀汾陰后土之月、吳興姚鉉集文粹成。」（大中祥符紀号の四祀、皇帝汾の陰に后土を祀るの月、吳興の姚鉉文粹を集めて成る。）、「鉉不揆昧憊、遍閱群集、耽玩研究、掇善擷華、十年于茲、方就厥志。」（鉉、昧憊を掇らず、遍く群集を閲して、耽玩研究し、善を掇ひ華を擷むこと、茲に十年、